

みんながありのままの自分でいられる明るい未来を創るために

3年2組17番 新開美月

3年2組35番 森田姫菜

3年3組6番 小田姉理

Keyword: 「多様性」「ルッキズム」「絵本」「偏見」、「差別」

1. はじめに

近年、ルッキズムが加速しており、あからさまではないが見た目による差別も一定数潜在しているのが現実である。特に、SNSの普及により人を見た目で判断してしまう風潮が広がってしまっている。実際にメンバーの1人は幼い頃から数多くの書籍・作品に触れ差別に対して問題意識を持っていた。特に見た目による差別をテーマにしている作品を視聴しルッキズムに関心を寄せていた。他の2人のメンバーも、SNSに触れルッキズムに対する問題意識を持っていた。それらのことから我々は最初の頃は、「校則(見た目に関するもの)は勉強・普段の生活に影響はあるのか?」という問いを立て、校則をテーマに探究活動を行っていく計画を立てていた。しかし、ゼミの担当の先生に「校則は地域の目があるからこの探究テーマで進めるのは難しい」と言われてしまった。我々はそれならば地域の目を変えてしまおうという発想に至った。まずは大きなスローガンの一つ掲げることとした。そのスローガンは、「みんながありのままの自分でいられる 明るい未来をつくるために」である。そしてこのスローガンを軸として、我々がこの探究活動を通して伝えたいテーマを三つ定めた。一つ目は、「偏見を持たずその人の本質を見てほしい」。二つ目は、「ありのままの自分に自信をもってほしい」。そして最後は「"普通"じゃなくて"自分らしく"」である。我々はこれらのテーマを基に、活動していくことを決定した。

2. 序論

我々は特に子どもの間にルッキズムに囚われると良くないと考えた。実際に人間の価値観が形成されるのは幼稚園生頃からだという論文を基に、子どもたちに向けて「みんながありのままの自分でいられる明るい未来をつくりたい」という我々の想いを伝えることを目標とした。想いを伝える手段として子ども達になじみであろう絵本を使用することにし、この目標から、「絵本により子どもたちからルッキズムを減らすことができるのか」という問いを立てた。

そもそもルッキズムとは外見を基準に人を評価し差別や不平等を生み出す社会的傾向を指す。日本語では外見至上主義と呼ばれる。この背景にはSNSやメディアの影響が大きい。テレビや広告では特定の美の基準が提示され、SNSでは「いいね」や「フォロワー数」によって外見の価値が数値化される。その結果見た目が個人の価値と結びつく結果を招いている。(eleministより)そうした中で固定された美の基準に従う風潮を断ち切るべく私達は絵本作成を進めた。

テーマに沿った物語のストーリー構成、キャラクターのデザインや色、文字の読みやすさなど一つ一つの設定を「子どもたちが理解しやすいもの」を前提として決定していった。大まかな内容を決めた後は、アナログで案を書き出した。見た目の違いにより差別を受けていた主人公が最終的には周りと一緒に団結して、見下していた人達も見方を変えて反省するというシナリオをどのように繋げるかを思索しながら下書きを完成させた。その後デジタルで線画、色塗り、本文の入力、最終イラストの確認などの作業で分かれ実際に発注するデータを作成し、外部業者に製本を依頼し絵本を完成させた。

3. 本論

我々は制作した絵本を外部に広めるため様々な活動を行った。まずは、この活動を多くの人々に知ってもらうために、SNSで活動を発信し、ホームページも作成した。最初は多くの閲覧数

を得ることができなかったが、国際中高公式のInstagramで宣伝していただいたことで一気に閲覧数が増え、多くの人々に認知していただくことができた。

外部での活動として、まず初めに奈良学園大学の図書館に展示して頂いた。奈良学園大学には人間教育学部が設置されており、保育士資格や幼稚園教諭一種免許状を取得できるため、保育士や学校の先生を目指している方々の視点で絵本の感想を得ることを目的とした。絵本の横に感想カードを設置し、感想を書いてくださった方にオリジナルで作った葉をプレゼントする方式にした。葉には、私たちが探究活動を通して届けたいテーマ3つと、絵本のキャラクターが描かれている。奈良学園大学の図書館は、奈良学園の生徒でなくても利用することができるため、より大勢の人々に絵本を知ってもらう機会となった。

次に我々は、大和郡山市にある大和郡山カトリック幼稚園を訪れた。本来の目的である「子どもに伝える」ことを達成に近づけるためである。幼稚園では実際に子どもたちに絵本の読み聞かせを行い、子どもたちから絵本の感想を集約した。分かりやすかった、面白かった、など好評な意見を得ることができた。また園長先生にも、卒園記念品の絵本にぴったりだ、とお褒めの言葉を頂いた。

次に我々は、地域の老若男女の人々に周知してもらうため、大和郡山市にあるやまと郡山城ホールにも絵本を寄贈した。絵本は2階のカウンター近くに設置していただき、奈良学園大学同様に感想ブースも設置していただいた。さらに、ホームページにも掲載していただき、回覧板でも回していただいた。これらの熱心な活動により、119枚の感想カードを得ることができた。幅広い年齢層の方々から感想を得ることができた。「おもしろかった」「様々な教育の機関で取り入れるべきだ」などの前向きな意見もあったが、「字と字のスペースが小さく小学一年生の子どもが読めなかった」という保護者からの意見もあった。

最後に、幼稚園では5歳くらいの子どものみへ伝えたいが、次は小学校の子どもたちにも伝えたいと考えた我々は奈良市にあるたんぽぽ子ども食堂を訪れた。実際に子ども達と触れ合い、仲を深めてから読み聞かせを行った。カトリック幼稚園の際より年齢層が少し上であったため、具体的な感想を得ることができた。たんぽぽ子ども食堂を運営している代表の方にも、「絵本の読み聞かせの機会は今まであまりなかったのでこれからたくさんこの絵本を読み聞かせたい」や、「また機会があったら来てほしい」と言って頂いた。

そして我々は、春頃から作品を募集していた「絵本出版コンテスト」にこの「きらとまるのせかい」を応募した。非常にレベルの高いコンテストであるため残念ながら入賞することはできなかった。しかし後日このコンテストを主催している会社の従業員の方からは是非お話しをしたい、と連絡を頂き、zoomでミーティングを行った。そこで絵本の評価などを聞くことができた。応募総数1200の中ではかなりの上位であったようだ。ただ入賞にまで至らなかったのはなぜか、どうすればさらに良くなるかのアドバイスや、実際に出版することになった場合のお話を聞くことができた。



4. 結論

短い期間の中ではあったが、この絵本をたくさんの方々々に認知していただくことができた。しかし、まだ認知の余地はある。この探究の問いである「絵本により子供たちからルッキズムを減らすことはできるのか」に対する答えとしては、減らすことができたと考える。子供達に対して読み聞かせする前と後ではあきらかな考え方の違いを感じる事が出来た。キャラクターの立場になって考える子や固定概念を崩して考える子どももいた。絵本を通して子供たちが感じ取った率直な感想や意見を実際に聞き、伝え方を工夫することで子供たちにも私たちの思いを伝えることが出来た。我々は「みんながありがたのままでいられる明るい未来を作りたい」という我々の想いを伝えることを目標としていた。この目標は非常に抽象的であり、目標の設定の際に明確な数字は決めていない。それは、この想いには無限大の可能性があると信じていたからだ。つまり我々の活動に明確なゴールはない。これからも更にこの絵本を広めていきたい。ただし、今回外部と連携したことで課題も見つかった。絵本の構成については、さらに付け加えた方がわかりやすいページも2ページほど見つかった。他にも、何か外部で活動する際、活動をしてから事後報告という形でSNSに掲載するのではなく、活動の前から告知しておくべきであったという問題点もあった。感想カードを書いてもらうために用意していたオリジナルの葉も数が足りなくなるなどの問題も発生した。これらの課題を改善していきながら、更に我々の活動を広めていきたい。

5. おわりに

我々は、この探究活動で得た力を活かし様々な分野で活躍していきたいと考えている。これからどう活躍していくかを、新開、森田、小田の順で紹介していく。

○私は幼い頃から「差別」に対して強い問題意識を持っており、今回の探究活動でも「見た目による差別」をテーマとして探究した。私はこれから、大学で法学部に進学し、この「差別」を法的視点でアプローチできるようになりたい。「差別」と「法学」は一見すると関連性のない様に見えるかもしれないが、差別は何か事件として法的枠組みに入るものでないと浮き彫りにならないのだ。例えば、1997年に奈良県、月ヶ瀬で当時25歳の男が中学2年生の女子生徒を惨殺する事件が起こった。男は女子生徒を自動車に乗せて連れ去り、山中で首を絞め、頭に石を落として殺害した。だがこの事件を犯罪学の視点から見ると衝撃的な事実が発覚する。男は部落出身者であり、村八分、という差別に遭っていたのだ。ただ「法学」と聞くと六法全書に記載されている条文の解釈、判例などが想像されるであろうが、法学にはもう1つ重大な要素がある。それが先程も述べた犯罪学、他にも被害者学、その他の背景も含めた「社会学」である。そしてその社会学の過程として「差別」が浮かび上がってくることがあるのだ。

刑法は犯した側の視点でしか書かれていない。多くの事件では女性がターゲットになりやすい。犯した側の刑法を、女性で、そしてこの「絵本で変えようプロジェクト」を通して差別について探究してきた私が読むと何か新しい発見や視点が得られるのではないだろうか。そして私は大学で条文、判例、社会学、これら3つを通して法学を学びリーガルマインドを培うことで、困っている人々を助けていきたい。

○私は将来この探求で学んだルッキズムや言葉で伝える大切さを生かし日本で挙式を考えている外国人に対しサポートできる存在になりたいと考えている。実際今の日本での挙式の3割は外国人の挙式であるというデータが出ている。今後インバウンドの関係で日本に訪れる外国人の割合はより増加傾向にあると予想されるため需要向上にはかなり期待できると考えている。日本のブライダル業界はサービス豊富で高い期待値がある一方で外国人とスムーズに会話し意思を限りなく理解出来る人材は少数であることが課題である。

また言葉での意思疎通が不十分なため希望通りの進行にならなかった。文化の違いから料理や演出に不満が残った。という声が出た事例も存在する。こうした場面で言語と文化の両方を理解した人材がいれば安心した挙式の実現に携われると思う。

これらを叶えるためにも私は外国語大学で英語に触れる機会を大切に、言語に加えて異文化を理解し合える人材を目指したいと考えている。

「外国人と私達の共生」と「きらとまるのせかい」は非常に密接で近いものだとは思わないだろうか。周りの人種が違う中で他の国に行ったり、そこでコミュニケーションを取っていくことはまるで「まるのせかい」に迷い込んだきらに類似していると感じている。私はこのことからこの探求はただ子供たちに留まらず大人や他の国の人々にも伝えていくことを目指し、SNSや寄贈活動を続け最終的には出版を目標に掲げて探究を続けたい。

○私はこの探求を通してみんなで協力して絵本を制作したり、自ら積極的に外部にアポを取り読み聞かせしたり、地域の人とコミュニケーションを取るなどの今までにない様々な経験をし成長することが出来た。この経験を生かし将来は英米語学科に進学し、航空業界に就いて色々な国の人と関わって異文化を学び、旅行者の旅が安全で素敵な思い出になるようサポートしたいと考えている。「きらとまるのせかい」は見た目で人を判断しないという意味が込められており、航空業界で多様な国の人たちと関わる際に先入観で判断せず、誰とでも関わっていきたいと考えている。外部との関わりで経験した地域の人とのつながりや絵本コンテストに応募した挑戦力などを活かし、将来は失敗を恐れずに挑戦しどんな状況でも冷静に対処できるような柔軟な対応力を身につけ社会の中で貢献できるような存在になれるよう努力していきたい。

6. 参考文献・出典

- ・平井信義(1991)。「人格形成論」『日本家政会誌』,
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhej1987/42/5/42_5_401/_pdf
- ・小川里菜。「奈良県月ヶ瀬村女子中学生殺人事件 1997」『Abema』.
<https://ameblo.jp/rinaogawa1994/entry-12893561969.html> 2025年5月4日
- ・ELEMENIST Editor エレミネスト編集部。「ルッキズムとは？その原因や社会に与える影響」『ELEMENIST』.
<https://elemenist.com/article/3531>.2024年7月10日
- ・「国際結婚カップルの実態」『ワタベウェディング』
https://www.watabe-wedding.co.jp/company/press/info/detail.html?press_id=386 .2014年10月9日